

ける強さがあつた。特に舌を巻いたのは、その守備だ。

「練習でも、もちろんめっちゃうまいんです。試合の時にホンマに練習でノックを受けてるみたいない捕り方する」

たとえば同点の9回裏、2死三塁。1点を奪われればサヨナラ負けの場面でも、まったく緊張感を感じさせることがない。難しいゴロをランニングスローでさばき守り抜く。精神力の強さを含め、そういった状況でも、自分らしいプレーをいとも簡単にやってしまえる。

試合に出られない池田が、引け目を感じてしまうのはしょうがないことだった。一緒に明治大野球部の門を叩いた宗山の背中が、どんどん遠くなっていく。そんなふうに思えた。

野球を続ける権利

3年生になると、周りが就職活動を始め出す。最初、次の進路の選択肢の1つとして通常の「就職」もあった。だが、「やはり違う」と感じ、卒業後も野球を続けることを決める。その決断に至るには、

大きな葛藤があつた。「どうしたらいいのかな? と迷いました。こんな何もでぎんく、

野球を続けられる権利はあるのか? とか。高校ではずつといい景色を見てきた分、こんな落ちぶれた自分を客観的に見て、続ける権利があるのか? っていうことはすごく考えて……。でも、野球が完全に不完全燃焼だった。ここで終わったら後悔するやろうなっていう気持ちはありました」

自分の野球人生に、まったく納得できていない。自分以外の人たちや、支えてくれた家族に自分がいまできることは、野球を続けることじゃないのか? NPBに行つて活躍することじゃないのか? 2つの選択肢があつた。1つは社会人野球に進んで野球を続けること。もう1つは、一発に賭けて独立リーグからNPBを目指すことである。

「自分のいまの立場を考えたら、ワンチャンスに賭ける場所にはない。それぐらいのリスクを背負つて野球をしないと、NPBは見えてこないなと思って」

やがて社会人野球という選択肢

写真協力=佐藤友美



池田 凜 (いけだ・りん)

二塁手・175センチ82キロ・右投左打。2003年3月9日生まれ、大阪府出身。履正社高〜明治大〜徳島インディゴソックス。中学時代は生駒ボーイズでプレー。3年時はジャイアンツカップに出場。履正社高に進むと、1年秋から二塁手のレギュラーを奪い、2年夏に全国制覇。明治大では入学当初から生活に慣れず、レベルにも戸惑うなど苦悩が絶え間なかった。大学卒業後、徳島インディゴソックスに入団。NPBを目指し、人間力とプレー面ともに向上する努力に励む。昨秋、DeNAにドラ1で入団した竹田祐は、中学・高校・大学の先輩。

が消え、独立リーグでプレーすることが現実味を帯びてくる。

まず頭に浮かんだのは四国リーグだった。その中でも毎年、NPBに選手を輩出し続けている徳島なら、チャンスがあるのではないかと。徳島にはかつて交流のあった加藤馨(現DeNA)や斎藤佳伸らが所属している。彼らを通じて球団と連絡を取り、練習に参加することになった。24年東京六大学秋季リーグ戦が終了した後、11月のことである。

「絶対にやってやる」

晴れて徳島の一員となり、25年シーズンの開幕を前にした練習や

練習試合が続く。ほとんど試合に出ていなかったブランクは、さほど感じなかった。辛い状況だったものの、明治大の練習にくらいつき続けてきたことは、嘘をつかなかった。だからいま、こうやって動くことができる。自分のやってきたことは間違っていない。

何より思いっきり野球できる喜びがあつた。

「この1年、絶対にやってやる」

胸の内にはもう、それしかない。もちろんNPBにいく。支配下でドラフト指名されるために結果を出す、成長する。

だが、野球だけやればいいのかと考えていない。自分なりの覚悟が